

秘密の物語



桜虎



1章 始まりの時

この物語はイリス、カズノ、シャオだけの秘密の物語

ここはジエンディア大陸 始まりの街ベロス。

イリス一行がお世話になっているレストラン2階。

そこにはなにやら重苦しい雰囲気だ……。

「ナ・ムーウェンは大丈夫かしら……」戦闘で傷をうけベッドで横たわってるナ・ムーウェン。

仲間が重傷を負い休息をとってる姿を見て、

それを心配そうに横で看病しているのがイリス・イヴィエール。

イリス・イヴィエール……銀色の髪の毛に小さな体に秘める不思議な力の持ち主

彼女はデル族と呼ばれる一族の末裔でジエンディア大陸から邪悪な妖怪アガシュラから守ろうと奮闘している少女

「傷がひどいから少し休ませてあげましょう」

やさしくイリスに語りかける女性シャオ・ユイ。

シャオ・ユイ……彼女は二胡という楽器を持つ剣の達人。

沈着冷静で常にイリスをサポートしている優しくもあり厳しくもある仲間

「だから俺は下がれと言ったんだがな」

冷たく言い放つカズノ・ナス。

カズノ・ナス……謎が多く、よく人をからかったりするつかみづらい性格の持ち主

物事を見通すことに長けていて絶対に欠かせない仲間の一人

「そんな言い方しなくてもいいじゃない」

少し怒ったようにふてくされるイリス。

カズノはやれやれと言わんばかりに呆れ顔で階段を下りていく。

「イリス……ナ・ムーウェンは休ませて次の旅の準備だけでもしましょう」

涙をこらえてうなづくイリス、シャオに連れられ階段を下りる。

ベッドに横たわる仲間をみて……ふとデル族の秘宝を思い出す。

「……星のかけら……」

昔デル族言い伝えの『星のかけら』という秘宝。

時空を曲げて未来や過去を強大な力を手にすることができる……それ以上思い出せなく頭

を振るイリス。

「今度は私が仲間を守るんだ」と頷き強く決意するイリス。

外に出るとカズノとシャオがなにやら話をしている。

「では、装備やアイテムの準備をしましょう」

シャオがそう言うとカズノが足早にどこかへ。

「シャオ・・・カズノは？」

「お金がないと何もできないでしょ？」

「彼は倉庫にエリーを取りに行くと言っていましたわ。そこのベンチで待ってましょう」

二人はベンチに腰をかけカズノを待つことに・・・・・・・・。

2章 星のかけら

時を同じくして。

ここは、鋼の街から少し離れた研究所。

「やっと・・・やっとこれで完成だ・・・」

そこには怪しげに実験に取り組む白髪のおじいさんその名はラウ。

「ラウさん、これで私たちは平和に暮らせるのですね・・・」

シンという白衣をきた若い研究員がラウに声をかける。

「ああ・・・そうだと・・・これで私たちは解放されるんだ・・・やっと完成するのだよ・・・」

ざわざわと研究員達の歓声が広まる中。

「みんな聞いてくれ！我々はとうとう完成させたのだよ！『星のかけら』を・・・」

「だが・・・どうしても最後に足りないものが・・・」

ラウが悔しそうに研究員達に語りだすと歓声が止み、静寂が研究所を包む。

その中若い研究員シンがラウに問う。

「ラウさん・・・一体その足りないものとは？」

聞こえてるのか聞こえてないのか少しも反応しないラウを見て不審がる研究員達。

小さくなにかブツブツつぶやくラウ。

ラウ「ブツブツ・・・これだけあれば足りるか・・・・・・これで星のかけらが完成だ・・・」

ラウはそうつぶやき早速未完成の石を頭上高く掲げる。

ラウが掲げる石がなにかを吸いこもうと小さな竜巻が起こる。

みるみる内に顔が真っ青になり次々に倒れる研究員達。

「ラウさん何を！？」

いきなり何が起こったのか理解できず叫ぶシン。

生気が吸い取られはじめたのか足元がおぼつかずフラフラしはじめるシン。

「ラウさん！あなたはこれを知ってて研究を・・・」

「フッフ・・・ハハハハッ！」

狂ったように笑うラウをみて、シンはポケットからあるものを取りだしつぶやく。

「やっと・・・やっと・・・家族の元に帰れると思っていたのに・・・」

ポケットから出した物を強く握りしめ。

最後の力を振り絞ってラウに体当たりをする。

不意を突かれたラウは『星のかけら』を落として倒れこむ。

「シン！？貴様！・・・な・・・何を！？」

『星のかけら』をラウからうばい取るとシンは手にワープクリスタルをかざす。

「逃がさぬぞ！」

ラウの手は届かず光になって飛んでいくシンと『星のかけら』

「くっそー！あの小僧！！絶対に逃がさぬぞ！！」

シンとワープクリスタルから放つ光を目で追うラウ。

「もう正体を隠しても仕方がないか・・・」

バキバキと大きな音をたて小さな体から大きな漆黒の羽を広げる。

先ほどまでのラウとは変わり果てて姿形は誰からみても妖怪の姿に。

羽をバサバサ広げ羽ばたく準備をし、シンが持っていった『星のかけら』を奪いに行くことに。

3章 未知の旅人

ベンチで待ち続けて30分ほど経ち少しイライラしはじめたイリス。

「カズノ遅いね・・・なにやってるんだろう・・・」

シャオはなにやら先ほどから空ばかりみている。

「あれ？イリス・・・あれ何かしら？光が降ってくるわ」

え？っと顔を上げたイリスの目の前を通過して着地できず地面にたたきつけられる白衣の男性。

「人が降ってきた・・・？・・・大丈夫ですか！？」

急いでイリスとシャオは白衣の男性に駆け寄る。

白衣の男性はもう虫の息でイリスに不思議な石を押しつける。

「これを壊してくれ・・・平和なんてどこにもないんだ・・・未来にも過去にも・・・」

壊れた人形のようにがくっと首を垂らす男性。

「え？もしかして死んじゃったの・・・？」

ショックを隠しきれず涙をボロボロ流し取り乱すイリス。

「落ち着いて！大丈夫よ！まだ息があるわ！」

シャオが叫ぶと同時に後ろから。

「何か大きな音したな！何かあったのか！？」

倉庫から戻ってきたカズノが尋ねる。

「カズノいいところに！この男性を私たちの部屋に！急いで！私は薬を買ってくるわ！」

シャオはそう言い放つと同時に道具屋に走り出す。

カズノは男性を抱きかかえるとレストランの2階のイリス達が借りている部屋に寝かすことに。

すぐにシャオが来て薬を飲み、落ち着いたらカズノが口を開く。

「よっぽど慌てていたんだな・・・こいつ・・・」

まじまじと男の顔を覗き込む。

ふう〜と一息つくイリスとシャオ。

きゃー！と叫ぶ声が外から。

急いで外に出る3人、そこには大きな漆黒の羽を揺らし吸血鬼のような大きな牙で街の住人を襲うアガシュラ。

悲惨な光景を目の当たりにし呆然と立ち尽くすイリス。

「くっ！戦うぞ！」カズノがイリスを押しつけ先頭をきる。

シャオがそれに続き剣を抜く。

その瞬間コウモリのような俊敏な動きで二人の攻撃をよける。

「ヒヒヒ・・・それが攻撃なのか？そんなものでこのラウ様が倒せるとでも？」

不気味に笑うコウモリ男ラウ。

「くそ！動きが早い！」

ラウの俊敏な動きについていけず追い込まれる二人。

「次はこっちの番だ！」

ラウが大きくそう叫ぶと口から出る光が二人に降り注ぐ。

「ぐはっ！」「きゃ！」

攻撃を正面から受けてしまい倒れこむ二人。

傷つく仲間に我に返るイリス、攻撃をしようと思っても武器が2階の部屋にあることを思い出す。

駆け出そうとしても動かない足。

「ヒヒヒ・・・無駄だよ・・・どうせ私に勝てないのだから・・・」

不気味に笑い二人に近寄るラウ。

「最初に殺すのはこの哀れな女と男からだー！」

翼を大きく広げ、羽ばたくように翼を揺らし風を起こす。

翼の風がかまいたちを起こしシャオとカズノに襲い掛かる。

イリスは目をつぶり・・・ふと思い出す・・・ナ・ムーエンも助けられなかった・・・。

また助けられないの？二人を見殺しにするの？

そんなのはいやだ、いやだ、いやだー！！

「おねがい！やめてー！！！」

イリスが泣き叫んだ。

その瞬間突如イリスの手から光が流れ出す。

「え？なにこれ？」涙がイリスの手にある石に流れ輝きは一層増す。

「な・・・バカな・・・それは・・・『星のかけら』！？」

コウモリ男ラウは攻撃対象をイリスに向け。

その瞬間光が強くなり光の中から二人の影が。

「うおっと！なんだこいつ？きったねーキバむけやがって・・・おらあ！！」

ラウに向けて手を交差し背中に浮いてる剣を投げ飛ばす男の子。

「シウンいきなり暴れちゃだめだよー」と注意をする女の子。

不意に出てきた1人の剣士に攻撃を正面からうける。

大きな体が倒れこみ、攻撃態勢に移ろうとした時、目の前にいたイリスに気付く。

イリスに体当たりをし『星のかけら』を奪って逃げていくラウ。

「なんだあ？あいつ・・・」

つぶやくシウンという名の剣士。

不思議な服装で目には髑髏の眼帯をし白のシャツに頭にはターバン、足にはサンダルを履き、まるで海賊のような男の子。

その体の一部のように動く背中にふわふわ浮いた2対の剣。

彼が命令すれば2対の剣が動き出す。

「敵かどうかわからないじゃない。どうしてすぐに攻撃しちゃうの？ダメだよ……。」
遠慮気味にシウンに言う。

綺麗な桜色の着物を着ていて鮮やかな黒髪に幼い顔の女の子。

その体には不釣り合いな程大きな手裏剣を片手で軽々と持つ。

とても穏やかな声で注意する。

呆気にとられたイリスが放心気味に二人に問う。

「あなたたち誰？」

めんどくさそうにイリスのほうを向き。

「あ～？お前こそ誰だよ。俺はソードダンサーのシウンだ！そこにいる女がハイランダーのクーだ！」

機嫌悪そうに答えを返すシウンに対してイリスは何が何だかわからず放心状態。

クーがイリスの顔を見てシウンに問いかける。

「あれ？シウン……この人イリスさんじゃない？あそこに倒れてるのはカズノさんにシャオさん？」

その言葉を聞いてイリスは我に返る。

「シャオ！カズノ！」

急いで二人のそばに駆けつける。

「なんとか大丈夫だ」

「私もなんとか」

二人とも攻撃は受けたがなんとか動ける状態で安心する。

「なんでお前ら襲われたんだ？」

シウンがイリスに唐突に質問する。

傷ついてる二人を見てつぶやく。

「わからないの……なんでアガシュラが襲ってきたのかわからないの！」

「ふう～ん。あっそ。」聞いた割には興味無さそうに返事をするシウン。

「もぉーシウン！聞いたならちゃんとした返事してあげなきゃダメだよお」

クーはシウンに対してブーブー不満を言う。

それに対してめんどくさそうにハイハイとうなずくシウン。

シウンに説教をするのをあきらめたクーはイリスに提案をする。

「イリスさん！とりあえずカズノさんとシャオさんの治療を！」

「そ・・そうだね！薬買ってくる！」カズノからエリーを受け取ると薬を買いに走りだす。

「っけ！めんどくせーなー・・・クー！俺は先にギルド連合に戻ってるぜ！」

歩き出すシウンに対してクーは怒る。

「シウン！困った人がいたら助けるのが僕たちのギルドの決まりじゃないか！？」

「薬がないなら俺はなにもできねーよ」冷たく言い放つと歩いて行ってしまう。

クーは小さな体を使ってカズノとシャオをベンチに運ぶ。

「ふう～・・・あとはイリスさんを待つだけか・・・」

一息ついてイリスの帰りをまだかまだかと待つクー。

すぐにイリスが戻り二人の治療をするのであった。

4章 旅支度

「助かったわ。ありがとうイリス、クーさん」

シャオは深々と頭を下げる。

カズノもシャオを見習って頭を下げる。

クーは遠慮深く照れくさそうに言った。

「いえいえ、困った人を助けるのが私たちのギルドの決まりですから。」

「では私は失礼しますね。」

クーは軽く会釈し部屋を出ようとする。

「ここにいたのかよクー・・・探したぜ・・・」

シウンが気だるそうに部屋に入ってきた。

「クー・・・俺たちは簡単には帰れそうにないみたいだ・・・」

「ベロスから行くギルド連合への道がなくなっている・・・」

それを聞いたクーは一瞬驚き苦い顔をしながら。

「それは困ったね・・・どうしよう・・・」

「ここは俺たちの住んでた時代なのか？」

その言葉を聞きイリスは思い出すシウン達がどうやってきたのかを。

「あ・・・もしかして持って行った石・・・『星のかけら』！」

「あれが帰るカギかもしれない・・・あなたたちはあの石から来たのだもの・・・」

びくくして顔を見合わせるシウンとクー。

「は？どういうことだよ！」とイリスに食ってかかるシウン。

それを止めにイリスとシウンの間に入るクー。

「シウンやめなよ！イリスさんから話を聞こう」クーに言われるとシウンはため息をつきながら椅子に座る。

「クーさんありがとう」イリスはクーにお礼を言うと昔のデル族に伝わる秘宝の話をはじめ。

「私はイリス。デル族の末裔でそのデル族の秘宝・・・『星のかけら』にはいい伝えがあつて。

『星のかけら』を手にしたものは時空を曲げることができて未来や過去・・・強大な力を手にすることができる」と

いきなり理解できない話をさせられ静まりかえる。

突然閃いたように立ち上がるシウン。

「ならさっさとあのクソコウモリから『星のカギ』を取り返そうぜ！そうしたら俺たちは帰れる！」

「シウン・・・『星のかけら』ね・・・」恥ずかしそうに言うクー。

「うっせ！わかってるよ！」顔を赤くして怒鳴るシウン。

さきほどから黙ってたカズノが口を開く。

「ならば次は我々が助ける番のようだな」

小さくシャオもうなづく。

「そうね・・・装備を整えてとりあえず情報を集めましょう」

みんなその意見に同意。

イリス一行とシウン達は流通が盛んなエリアスに向かうことに。

「俺ここに来る前に拾った武器エンチャントしてくらー！」と駆け出すシウン。

いきなり立ち止り振り向き。

「おっとその前にオプションリフレッシュか・・・」

シャオが突然口を開く。

「イリス・・・エンチャントと？とやらとオプションリフレッシュとはなんですか？」

イリスは驚いたように答える。

「そ・・・そっか。シャオはエンチャントやオプションリフレッシュはしたことがないんだね。

えっとねエンチャントって言うのは武器にパズルってアイテムでいろんな力を付け加えることができるんだよ」

「な・・・なるほど・・・はじめて知ったわ・・・。」真剣な顔で聞くシャオ。

「それでオプションリフレッシュっていうのは元々ついてた武器の力を変えてくれることだよ。

たとえば・・・火属性の武器を水属性に変えたりできるの。

確実に変えることができないから2回に一回はリフレッシュ失敗するみたい。

そのリフレッシュしてくれるのがあそこにいるトニオさん」

それを聞くと一気に血の気が引くシウン。

「マジかよ・・・あいつここにもいる・・・の？・・・俺のお金・・・エリーが・・・」

珍しく静かなシウンをみてイリスがクーに尋ねる。

「クーさんどうしてあんなにシウンはへこんでるの？」

苦笑いしながらクーは答える。

「実は・・・この前作ったシウンの武器がオプションリフレッシュだけで・・・ごによごによ」

クーは金額はイリス達に教えてあげた。

「そ・・・そんなに・・・？」

その瞬間にイリス、カズノ、シャオは血の気がひいたのであった。

それからはイリス、カズノ、シャオの3人はクスリや武器を用意しシウンとクーのもとに。

心配そうにクーが見守る中まだオプションリフレッシュを頼んでるシウンが居た。

「トニオさんもう少しまけてくれよ！この通りだ頼む！」

本気で頼む姿は必死でイリスは苦笑いをしてしまい少し離れたところのベンチ型のブランコで休むことに。

「申し訳ありませんが、珍しい武器なのでリフレッシュにも金額がかかってしまうのです」
迷惑そうにトニオさんが困っているのを見てカズノが笑う。

「あと2回リフレッシュしてもダメならあきらめる！」
開き直った男らしい？シウンが決断を下す。

カン・・・カン・・・カン・・・

「申し訳ありま・・・」

トニオが謝るや否や切りかかりそうなシウンをクーが必死に止める。

「落ち着いてシウン！トニオさんも失敗したくてしてるんじゃないんだから！もう一回！もう一回やってみようよ！」

クーの説得の甲斐があってかシウンはおとなしくもう一回分の代金を払う。

カン・・・カン・・・カン・・・

「できました！満足いただけるはずです」

トニオは満面の笑顔で武器をシウンに渡す。

「おおおお・・・やればできるじゃねーか！トニー！！」

喜びのあまりはしゃぐシウン、それをみて目も当てられないって顔でクーが頭を抱える。

「いえ・・・私の名はトニ「ありがとな！サンキューな！」お礼を言い出来上がったばかりの武器を持ってパズルを買いに行くシウンをみてシャオも思わず笑ってしまう。

カズノが立ち上がり。

「さあて情報通のトニオさんに聞いてみるか」

カズノがトニオさんと会話をしてるとクーがイリス達に寄ってくる。

「シウンがお見苦しい所をみせてしまい申し訳ありませんでした」

頭を下げるクーに対しイリスも苦笑いしながら答える。

「シウンが相棒なら大変だね。すごいわがままそうだもんね」

クーもイリスに釣られ苦笑いをしながら。

「大変かもしれませんが・・・私とシウンは仲間でありパートナーでもあるのです。だから大変でも私は幸せです」

その答えに目をぱちくりしてしまうイリスとシャオ。

「パートナー？」

「私とシウンは新婚なのです」

照れくさそうに笑うクーに対してなぜか空を見上げてしまう二人。

「シャオ・・・世界は不思議だね」

「そうですね・・・理解を超えてしまいますわね」

しばらくの間遠くを眺めてしまうイリスとシャオであった。

カズノが戻ってきて困った顔をしてため息交じりにイリス達に話。

「コウモリ男は闇の森の奥にあるアガシュラのたまり場に向かって飛ぶのをみたらしいのだが」

カズノは厳しい表情を変えないまま話続ける。

「実はそこには城があって炎が渦巻いてて入れないみたいなのだが唯一通れる方法がある」
「厳冬のラビリンスの奥にある守護神ビントーを倒しフローズンクリスタルで炎を一時だけ消せるみたいだ」

カズノが言い終わるとシャオが口を開く。

「ならば私たちの行き先は・・・厳冬のラビリンスね」

さっそく立ち上がるイリス一行。

タイミングよく帰ってきたシウン。

「やっとできたぜ！最高の武器だ！！やったぜ！クー！」

戻ってくるとクーに拳を突き出すシウン。

笑顔で拳を作りシウンの拳にぶつける。

イリスがその一連の動きをみて尋ねる。

「それは未来の挨拶みたいなのなのかな？」

そう尋ねるとクーが答える。

「これは私たちのギルドの仲間の証みたいなのので喜びや悲しみを分かち合う時に拳に想いを乗せてぶつけるのです」

イリスがうらやましそうに「いいなあ・・・ギルドって暖かいね・・・今度私もシャオやカズノにやってもらおうかな」

クーが拳をイリスに向ける。

「私たちはもうとっくに仲間なのです」

ニコっと笑い拳をぶつけ合う二人。

さっそく5人は厳冬のラビリンスに向かうのであった。

5章 仲間の絆

ここは厳冬のラビリンス。

冷たい風と鋭い雪がイリス一行に降りかかる。

「そろそろ終盤なんだと思うのだが・・・」

カズノが入り組んだ道を悩みながら進んでいく。

ワオーン！！どこからともなく咆哮が響き渡る。

その瞬間白く輝く狼達・シルバーウルフがイリス達を狙う。

身構えるイリス一行。

「下がってて・・・」

シャオがそうつぶやくと剣を腰にあて目をつぶり態勢を低くし戦闘態勢をとる。

シルバーウルフはシャオをみると一斉に飛びかかってくる。

「滅せ・・・・・・・・・・一閃！！」

一つの閃光のような剣戟がシャオから繰り出される。

シャオから放たれる一閃にシルバーウルフたちは次々に宙を舞う。

攻撃を受けバタバタと倒れていく。

「さぁ行きましょう」

涼やかな顔をして進むシャオ。

その後ろについていくイリス達。

突如視界が暗くなる・・・。

目線を上げると大きな斧を持つ牛の男・ミノタウロスがイリス達に襲い掛かる。

それと同じく、再びシルバーウルフ達が現れたのだ。

慌てて迎撃態勢をとるイリス一行。

「次は俺とクーに任せてくれ」とイリス達の前に飛び出るシウン。

「新しい武器の性能を確かめる時だな！！クーいつもの頼む！」

そう言い放つとシウンは少し離れて構える。

「任せて！」

大きな手裏剣を振り回し小さな体を回転させ小さな竜巻が起こりシルバーウルフとミノタウロスが吸い込まれていく。

「スパイラルストーム！」クーが叫ぶと敵が小さな竜巻に飲み込まれ寄せ集められる。

「今だよシウン！」クーが竜巻から少し離れて合図を出すとシウンは手を空にかざし。

「喰らえ！！飛天！！」シウンが手をかざし空から無数の7色の剣が敵に降り注ぐ。

一瞬にして敵を撃破する二人のコンビネーション。

更にラビリンスの奥を目指す。

「ん？なんだあれ？」

カズノが何かを発見し全員がその方向を見る。

大きな氷の塊が微かに動いてるように見える。

カズノが近寄ると。

「あぶないわ！」

シャオが叫ぶと同時にビュン！っとカズノの目の前に氷の剣が振り降ろされる。

すぐに距離をとるカズノ「あぶなかったぜ・・・」

カズノはシャオの声のお陰で攻撃を受けずにすんだ様ですぐに戦闘態勢をとる。

氷の塊はよく見ると地面に氷を根付きそれはまさに大きな氷の巨人。

両手に大きな氷の剣、吹き荒れる吹雪を体に纏う厳冬のラビリンスの守護者ビントー。

「気をつけて！何かしてくるよ！」

遠目でみていたクーがビントーが動きを変えたことに気付く。

大きな巨人は自らの体から剣のように鋭いつららを取りだしイリス達に投げつける。

先に回避用意ができていた5人はその攻撃をなんなく避ける。

「次がきますわ！」

氷の剣が風を切りながらカズノとシウンと狙う。

二人ともビントーの後ろに回り込むように回避し続ける。

「距離をとりつつ挟み打ちで倒すぞ！」

カズノがイリス達に攻撃指示を出すとシウンがそれを無視するように攻撃を繰り返す。

「シウン下がるんだ！」

「うるせー！お前の指示なんて聞けるか！」

喧嘩を始める二人、ビントーの剣が近くにいるシウンを薙ぎ払うような攻撃。

戦闘能力が高いシウンは軽々とそれを避ける。

「あぶね！今取りこみ中なんだよ！」

不意打ちをするビントーにシウンが一喝

「シウン！おねがい！今はカズノさんの言うことを聞いて！」

敵の奥からクーの声が聞こえ「ちっ！わかったよ。今回だけだかな。」

渋々納得するシウンをみてカズノがすぐに指示を出す。

「近くに行くと剣とつららの二つの攻撃を喰らってしまう！前後から中距離、遠距離攻撃で様子をみよう！」

「なら話は早いぜ！行くぜ！飛燕破天！」

シウンが叫ぶと地面に突如魔方陣が出現し同時に巨大な氷が削られるように巨大な剣が魔方陣から現れる。

待ってましたと言わんばかりに早々と繰り返すシウンの攻撃はダメージはあるものの倒れる様子は一向にない。

「後ろからも攻撃を頼む！」

カズノがイリス達に指示を出すとシャオの一閃、イリスの弓、がビントーの背中に放たれる。ぐらっと倒れかける氷の巨人、それを見逃さないカズノ。

「そうか・・・わかったぞ！背中が弱点だ！」

カズノの鋭い洞察力で弱点が露わにされた。

「なるほどな！お前中々やるじゃねーか！」

褒め言葉にしては少し乱暴なシウンが攻撃を繰り返そうとするがそれを止めるカズノ。

「下がっている。たまにはオレにも活躍させろ。」

すぐに呪文を唱えるカズノ。

「ふっ・・・すべてを焼き尽くせファイアメテオ！」

カズノが魔法を唱えると頭上に炎の渦ができ球体になっていく。

指をパチンと鳴らすとビントーの背中に炎の球が飛んでいく。

炎が大きな氷の背中にぶつくと爆発し爆音と炎の熱が辺りを包む。

氷が融け辺り一面が霧に覆われたような光景。

その中をイリス達は敵の姿を探す。

「やったの・・・？」息をのむイリス。

「まだよ！」シャオがいち早く敵を発見し叫ぶ。

大きな氷の剣は粉々になり背中、なにかに挟られたような傷跡がくっきりとある。

一番敵の近くにいるクーにカズノが叫ぶ。

「クー！とどめを刺すんだ！」

その言葉に反応するようにクーは手裏剣を構え渾身の力で投げる。

「これで終わりだよ！スパイラルエディション！」

クーが投げた手裏剣は目には見えない速さでビントーを貫く。

貫いた手裏剣はクーの手元に戻り、もう一度投げてビントーにとどめをさす。

耐えきれなくなったのかガッシャーーンと大きな音を出し氷の巨人は崩れ落ちる。

「倒したのか・・・？」シウンが息を飲みその光景を見守る。

崩れ落ちた氷の上をカズノが歩き氷の丸い物体を手にする。

「これがフローズンクリスタル・・・」食い入るようにみるカズノ。

それを聞いて皆がカズノの元に集まり次の行き先について話し合う。

早速アガシュラの城に向かう為に闇の森に向かう一行。

その道中

「おい！カズノ！さっきはよくもオレを差し置いて魔法なんか出しやがったな！」思い出したかのように怒るシウン。

「ふん。たまには譲ることも覚えろ。」冷たく言い返すカズノ。

その間に割って入るクーが「まあまあ」と言いながら二人を宥める。

シャオがそのやり取りをみて、ため息をつきつづやく「大丈夫かしら・・・この先が心配だわ」

シャオの言葉でイリスも少し不安な気持ちになるのであった。

最後の決戦に向かう一行が闇の森を抜け、その向こうに見える光景に絶句するイリス達。

6章 決戦の想い

やっと炎の城壁までたどり着くことができた5人

「カズノ！城壁をおねがい！」カズノはすぐにフローズンクリスタルを取りだし、炎の城壁にかざす。

炎が弱まり入口の道ができた。

5人は飛びこむように入口に駆け込む。

それと同時に炎の城壁が復活する。

一息つくとすぐに上の階に昇るための階段を探す。

階段を発見しすぐに駆け上る5人。

最上階・・・そこには『星のかけら』を大事そうに持つラウが待っていた。

「待っていたぞ・・・」不気味に笑うラウ。

「『星のかけら』をこちに渡しなさい！」イリスが叫ぶとラウが睨みつける。

「なぜ・・・こいつらは来れたのだ・・・？」ラウがつぶやき目の先にはクーとシウン。

「おい！お前！オレ達を元の世界に返せ！」シウンが攻撃を繰り出そうとする。

それを軽々避けると一瞬にしてイリスの目の前に。

「そうか・・・デル族の娘か・・・その目・・・汚らしい！」イリスに平手打ちをするラウ。

イリスは壁にたたきつけられ、なんとかフラフラした足取りで立ち上がる。

突如ラウは怒り狂い叫び出す。

「くそー！この石はデル族しか使えないのか！！」暴れ出すラウ。

周りの壁や天井を壊し外が丸見えの状態に。

ラウはクーとシウンを指さし「貴様達が来たのはそこにいる小娘が願ったからだ！この石を使って呼び寄せたのだ！」

また狂いだしたように叫ぶ。

「ど・・・どうせ！使えないなら溜めたエネルギーを私のものに！」

『星のかけら』を飲み込むラウ。

ギリギリと音を立てながら更に体が大きくなるラウ。

「まずい！魔力が高まっていくぞ！」カズノが叫ぶと同時にラウに攻撃を仕掛ける。

カズノの放った魔法はラウの手で簡単に払われてしまう。

「そんなものが効くか！」ラウの体の変化は治まり。

一層大きくなった翼に牙は鋭く、肘からは大きな棘。

「これが・・・『星のかけら』のパワーか・・・」確かめるように自分の体を見渡す。

翼をはばたかせ上空に飛び体制を立て直す。

「逃がさないよ！」クーが素早い動きで手裏剣を投げる。

それを紙一重で避けたが、避けた先にシウンの飛燕剣が待ち構える。

「これでもくらいやがれ！」シウンが手を振るとラウに攻撃が当たる。

攻撃を受けた自分の翼では支えきれないラウが落ちてくる。

落ちてくる先にはカズノが待ち構えていた。

カズノが魔法を唱えて攻撃魔法を繰り出そうとしている。

ラウは傷ついた翼を使い急加速し、詠唱中のカズノに突っ込む。

カズノはラウの攻撃をうけて、壁がこわれている方向に飛ばされる。

クーがいち早くカズノの危機を感じ受けとめようと飛びつく。

急降下に加速を足したラウの体当たりは止ることを知らずカズノを受け止めたままクーは飛ばされる。

飛ばされたカズノとクーの後ろに受けとめようとシウンが飛んでくる。

「一緒に死なれちゃ困るんだよ！！」飛燕剣を地面に深く刺し、それを足場に二人をがっちり受け止める。

「ふふふ！死ねー！」ラウがまた上空に飛びあがる。

受け止めたとはいえ、無防備な3人に追撃を繰り出す。

「させない！」シャオの剣が攻撃を防ぐ。

イリスも援護に回り、ラウは追撃を止め後ろに下がる。

3人は立ち上がると、すぐに武器を構える。

「そろそろ決着でもつけようか……」そうつぶやくとラウは禍々しい邪悪なオーラを体に纏う。

シャオが一閃の構えで迎撃しようとする前に、そのうしろに魔法詠唱しながら走るカズノ。

二人同時に攻撃を出す……ラウは二人の攻撃を正面からうけてもダメージはなく微動だにせず。

「消えろ！」ラウのオーラを纏った右手がシャオとカズノに叩きこまれる。

二人は床に叩きつけられる。

ダメージを負ったカズノは立ち上がれず、シャオは膝をつけ肩で呼吸している。

二人にとどめを刺さんとばかりに翼をはばたかせる。

「させない！」イリスが攻撃を阻止させようと弓を放つ。

だがラウは避けようとはしない。矢は刺さらずはじかれる。

それを無視するように更に強く翼をはばたかせる。

突如シウンが叫ぶ「クー！本気出すぞ！」クーが頷く。

「「奥義！！」」二人から同時に7色のオーラが溢れ出る。

「俺たちの仲間はやらせねー！」シウンがラウに向かって行く。

クーは深手の二人をかばうように、二人に背を向けラウの方向に手裏剣を投げる。

それを避けず受けとめようとするが……シュッ！と音をたてラウの体に傷をつける。

「ぐは！バカな！？なぜ受け止めきれない！？」攻撃を防げると思ったラウは驚く。

「バカはテメーだ！」驚く一瞬の隙を見逃さないシウン。

懐に飛び込むように間合いに入り、手を交差し飛燕剣が十字に切り裂く。

避けようと体を反らしたのが災いとなり翼に渾身の一撃があたり翼を失う。

叫びながらおちてくるラウにクーが手裏剣を持ち走りだす。

「スパイラルストーム！」クーが作り出す小さな竜巻に飲み込まれ地面に叩きつけられる。

「こいつらの力・・・なにが起きてるのだ・・・」立ち上がっても訳が分からず立ち止ってしまふ。

「とどめだよ！」クーが走り出すとシウンも合わせるように攻撃を繰り返す。

正面からは手裏剣が高速で飛び、上からは7色の召喚された剣が迫る。

「ぐあー」ラウの叫びは響きわたる。

ラウは膝をつきかろうじて生きている。

すぐに立ち上がり「ふふふ・・・私を本当に倒していいのかね？私は今『星のかけら』と融合しているのだぞ？

私が消滅すれば貴様達も帰れなくなるのだぞ？この意味がわかるかね？」怪しく笑いながら二人に問いかける。

「・・・奥義が・・・きれちまったか・・・くそ・・・」奥義状態が切れた二人は反動でしばらく動けないのか、そこに立ち尽くしてしまう。

「イリスさっさととどめをさせ！」シウンが叫ぶとイリスの異変に気付く。

「倒したら二人は帰れないんだよ！？もしかしたら他に方法があるかもしれな」イリスが話すと話を遮るかのようにクーが叫ぶ。

「何を言ってるの！？帰れなくても私たちは構わない！誰かが傷つくほうが後悔する！」おとなしいクーが声を荒げて叫ぶ声にびっくりしてしまうイリス

「お前がやらないとカズノやシャオもやられるかもしれないんだぞ！さっさとしやがれ！」

少し黙ったまま顔を下げてしまうイリスにシウンが怒鳴る。

決意したイリスは顔をあげ弓矢を構える。

「クー、シウン、ありがとう。私はみんなを守りたい。」

弓に渾身の力を溜めるイリス。

呆然を立ち尽くすラウはダメージが大きすぎるのか動けない。

「みんな・・・力を貸して・・・インフィニティ・・・ダンス！！」

青く光る弓からは高速の矢が放たれる。

何本放ったかわからないほど速く、鋭い矢はラウに刺さる。

「ぐわああああ！おのれー！」叫ぶとラウは小さな光を放ち少しづつ消えていく。

「この光・・・まさか・・・『星のかけら』！？」確認するように手で触れようとするがすぐに輝きを失ってしまう。

「シウン！クー！これで帰れるかもしれないよ！」イリスが二人を呼ぶ。

「やっと、奥義の反動がとれたか」重たそうに体を起こしクーに近づくシウン。

クーの腕をつかむと強引に立たせて背中におぶる。

ふらふらしながらシャオとカズノ方を向き。

「カズノ・・・テメーは嫌いだ・・・シャオ元気でな！」悪態をつくシウン。

「カズノさんシャオさんお世話になりました。またお会いできたらしましょう。」丁寧なお礼を言うクー。

イリスの元に寄り二人は小さな光を浴びる。

「シャオ、カズノ・・・いえ・・・この世界を守ってくれてありがとう。あなた達のこと忘れな

いわ！」

「イリスさんありがと。これから先もがんばってね。私たちのことはこの5人だけの秘密で。歴史に残って未来が変わってしまったら困るもの。」クーが冷静にイリスにお礼と想いを告げる。泣きながら頷くイリスに拳を突き出すクー、イリスが気づいて拳を合わせようとするシウンの勢いがある拳がぶつかる。

照れくさそうにそっぽを向いて拳だけ出すシウンに二人はくすくす笑ってしまう。

「それじゃ・・・二人とも元気でね。」イリスが最後のお別れをすると祈るように手を合わせる。

小さな光が強く輝き二人を包む。光が鋭く光ったのち空に消えていく。

無言で光を追うように空を見るイリス。

こうして、短くも長い戦いは終わる。

だがイリス達の旅は終わらない。

語り継がれない5人だけの物語。